講演④　関東・東北の古墳時代社会の動態と城柵の成立

講演者紹介

若狭　徹（わかさ　とおる）

明治大学文学部史学地理学科卒業。高崎市教育委員会文化財保護課長を経て、現在、明治大学文学部准教授。史学博士。専門は日本考古学。

「関東・東北の古墳時代社会の動態と城柵の成立」

明治大学文学部准教授　若狭　徹

はじめに

皆さんこんにちは、ご紹介いただきました。明治大学の若狭でございます。私は、これまでの先生方とちょっと研究している時代が違いまして、少し古い古墳時代を専門としております。ですので、今日このあとの議論が噛み合うか、とても不安なんですけれども。私は今日、話題になっております東北城柵の前史をご紹介したいと思います。どのように東北の農耕社会が開かれていって、城柵が現れるかというプロセスを紹介してまいりたいと思います。よろしくお願いいたします。

一　古墳文化と前方後円墳ネットワーク

今日話題になっています「城柵」は、飛鳥・奈良時代以降の大規模な列島改変、そこへの国家的なアプローチの象徴だったわけですね。そこで今、ご紹介があったような対蝦夷戦争も行われているということで、その対象となった蝦夷のイメージはというと、国家にまつろわぬ人々、王化と制圧の対象、それから中央から見ると得体がしれない存在と、そういう像が描かれているわけです。ただ、果

たしてそうなのかというのを、古墳時代を通じて考えてみたいと思います。と申しますのも、ここにいらっしゃる皆さんは関西、古墳の本場の方々です。巨大前方後円墳があるのを、日々見慣れていらっしゃる方々ですが、東北にも大きな古墳が実はあるのですね。そして、その古墳時代の三五〇年の間には、大規模で波状的な南北関係があるわけなのです。それは大きく三つ。一つは集団移動と耕地開発です。これは環境変動を伴っております。それから渡来技術の導入と新産業の展開、朝鮮半島との交流の中で新しい技術の波、人がやってくるという波がありました。

そして、それを結ぶ、北海道から朝鮮半島にまで至る「長距離物流ネットワーク」、これが古墳時代に結ばれているわけです。その結果、東北にも前方後円墳が築かれていきます。古墳時代の始まりと終わりは前方後円墳の出現と終わりで象徴されるのですが、そこには「前方後円墳システム」、「前方後円墳ネットワーク」というのが築かれたと考えられております。古墳時代になる前の弥生時代というのは、バラバラに国々が併存している社会です。それを乗り越えて、前方後円墳という同じ形のお墓、同じ考え方で結ばれる連合体ができたのが古墳時代の特色なわけです。ですので、東北に前方後円墳があるということは、そういうシステムに加入しているのだと考えられます。前方後円墳というのはランドマークでもありますので、前方後円墳があるところは、安全に物



が行き交うような経済圏が確立している。海運とか陸路とかの安全保障体制、夜盗に襲われず海賊に襲われずに安全に物が行き交うような体制が確立したのです。そういうランドマークとして前方後円墳があるところを目指して、人々が交流する、そういうネットワークができた。これが古墳時代の大きな特色だと思います。そういうシステムに東北は入っているわけです。その辺を確認しておきたいと思います。

二　古墳文化の成立と北進

（一）前期古墳文化の成立

それで、東北地方の古墳時代がどう始まるかということなのですが、東北地方の弥生時代後期はちょっと人口が少ないのですね。遺跡が非常に少ない。比較的広い土地が空いているような状態でしょうか。その南にあります関東地方の地図が図1です。関東地方の弥生時代はご覧のように小さな土器様式圏がありまして、それぞれ国々のようなものがあるわけです。そういう状況が三世紀に入りますと大きく解消されます。このAとBの波があるのですけれども、東海地方から大量に人が入ってくるのです。この関東にも人がたくさんいるのですけれども、実は関東の弥生人たちは低湿地の開発が苦手なのです。ジメジメしたところをほったらかしにしてありました。そういうところに東海地方から木曽三川が流れる濃尾平野を開拓してきたような、ジメジメした土地が好きな集団が大量に入ってく

るのです。そして、在来弥生人がいないような低湿地を大規模に開発していきます。そして使えなかった低湿地をまたたくまに水田に変えていって関東に大きな前方後円墳や前方後方墳が登場するという流れがあります。この流れが、もう一つの流れを生みます。特に、この房総地域の集団がこの流れに突き動かされて、北関東へ拡散していくのです。それまでこの地域には首長があまりいなかったり、「環濠集落」という守りの村がない。比較的そういう緩やかな社会が存在していました。そこに東海集団が拡散をしていって、それまでとは違う階層社会を作り上げていく。そして、この余波がこの「ひたちなか」辺りの大きな港から、さらに船に乗って北のほうに波及していく、あるいは中通りを通って東北に入っていくということで、この房総地域の集団が大きく展開をして、東北に大量に入っていくということが分かっています。

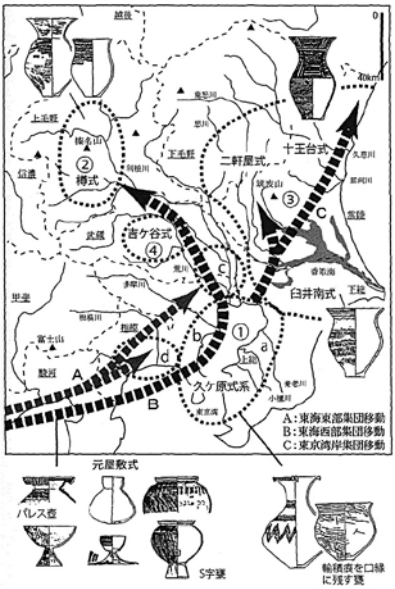


図１　関東における古墳文化の成立

このように、太平洋岸では東海地方の集団が、日本海側では北陸北東部集団が東北地方へ大規模に動いて行く現象がありまして、これは環境難民だという考えが最近なされています。最近、環境学者の研究、自然科学の方の研究がたいへん進みまして、遺物の中に封じ込められた酸素同位体ですとか、湖にたまった年縞という砂の層、そうい



写真１　宮城県伊治城跡出土の塩釜式土器
（栗原市築館出土文化財管理センター）

うところを分析していく中で環境変動のことが分かってきて、弥生時代後期にはものすごく雨が降ったということが判明しています。実は、いま我々が暮らす社会はすごく安定期にありまして、最近大雨がありますけれども、弥生後期には、ああいう状態が何百年も続いたということが分かっています。要は田んぼが作れなくなった北陸、あるいは東海の人々が環境難民として北上してくるということが分かってきたのです。そういった集団が関東地方の弥生社会を再編すると、玉突きのように千葉県地域の人たちが北進し、東北に定着していくのですが、その結果として成立しているのが東北地方の古墳時代前期の土器様式です（写真１）。この中に在来の東北の弥生系の要素がほとんど残っていないのです。特に、右端のような平底の甕、煮炊き具が定着するのですけれども、この甕の形式が房総地域、千葉県地域にあるということで、千葉県地域の集団が大挙して移動していって北関東や東北の太平洋側の弥生文化を開くということが証明されているのです。

そうやって、４世紀の前半には東北地方に前方後円墳が出現してまいります。東北の古墳の変遷を示したのが表１で前期前半、前期後半、中

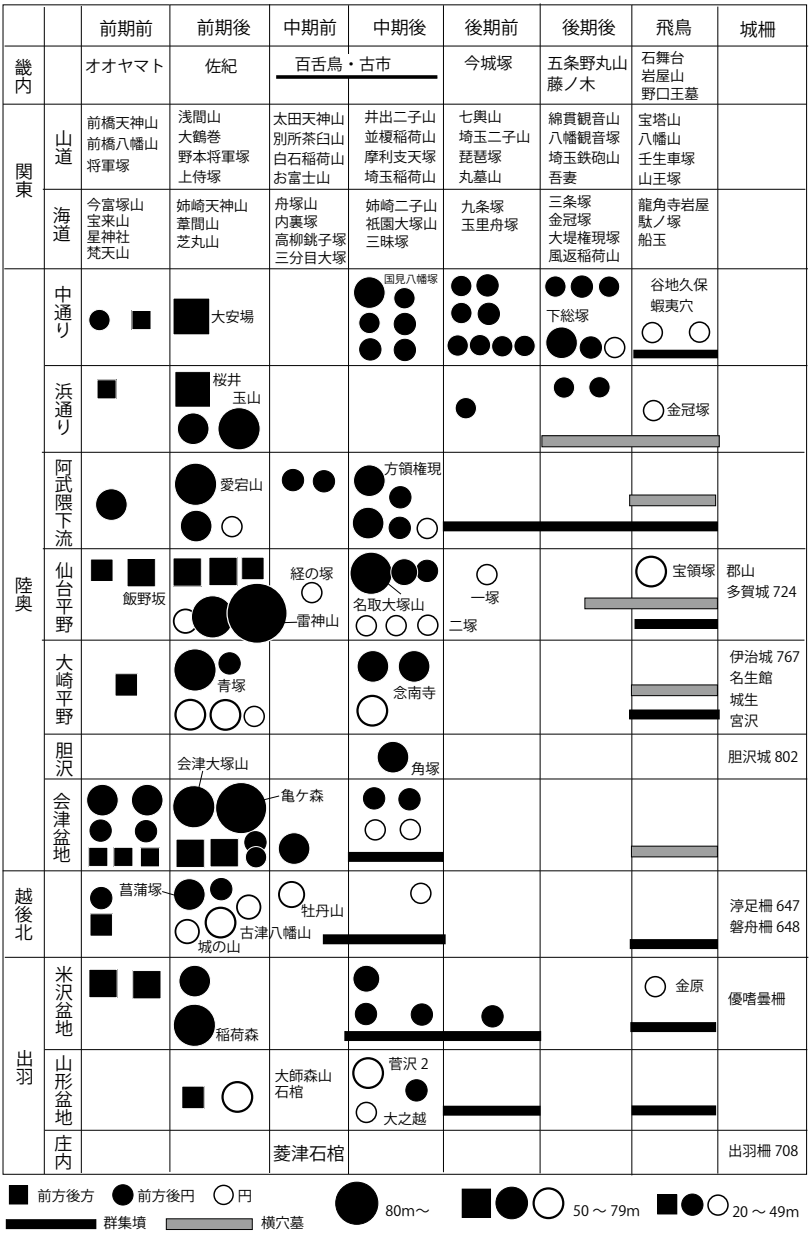


表１　古墳の推移と城柵の関係

期前半、中期後半、後期前半、後期後半というふうになっております。

これを見ていただきますと、東北地方では前期のうちにもう大きな前方後円墳がたくさんできているのがわかります。四角い印は前方後方墳で東海系統のお墓、それから丸い印が前方後円墳で大和王権と結びついた豪族のお墓になりますけれども、四世紀の後半にはもう大きな前方後円墳がたくさん林立しているというのがおわかりいただけるかと思います。しかしながら、中期の前半、ヤマトでは古市（ふるいち）・百舌鳥（もず）古墳群の頃ですが、その頃になるとこうシューッとしぼんでしまうのですね。この頃から寒冷化になったともいわれています。古墳寒冷期というのですけれども、ものすごく寒くなったと、そういうことで一度定着した農業がここでいったん破綻している可能性も考えられます。しかし、中期後半になりますとまたグッと古墳がたくさんでてくるという揺り戻し現象があります。そして後期前半、継体朝の頃なのですけれども、その頃はまた少し縮みます。そして、後期の後半になりますと福島県を中心に、また揺り戻しで前方後円墳が再出現しまして、飛鳥時代になると群集墳とか横穴墓が大量に築かれると、こういう流れを示しています。

（二）共立王の登場

前方後円墳が出てきたり無くなったり、出てきたりという繰り返しをしながら継続していくのです。図2は大きな古墳、東北地方における一〇〇m級前方後円墳、前方後方墳の図面を貼り込んでみました。前期前半に会津地方の方で大きな前方後円墳が登場しまして、そのあと前期後半にピークを

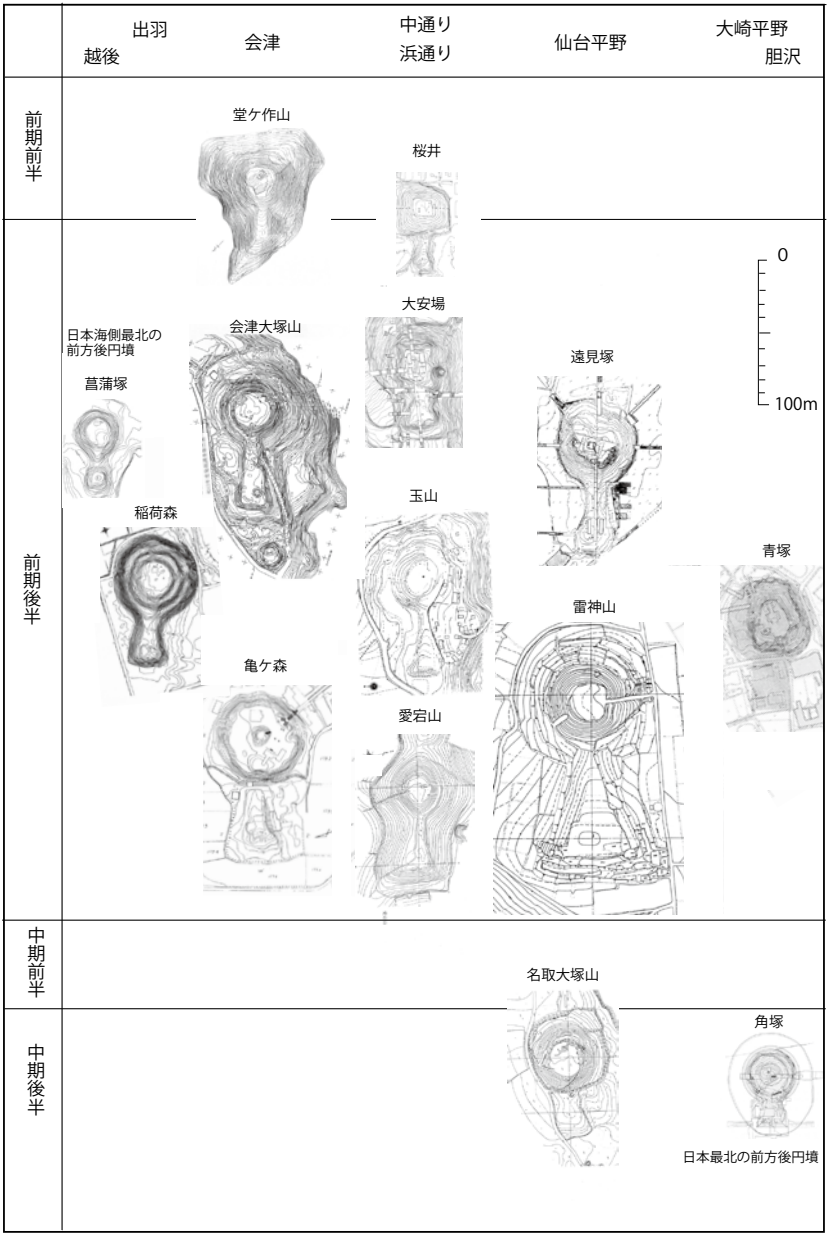


図２　東北地方の大型前方後方墳・前方後円墳
（墳長 80m 前後以上と最北の事例）

迎えます。雷神山古墳は、宮城県の名取市にあるのですけれども、これなどは一六八mという大きな前方後円墳です。こんなものが登場しているというのが、東北の古墳時代前期の実像ということになります。図3は古墳前期の東日本の状況を示した図なのですけれども、くり返しになりますが、東海集団が南から入ってきた。これに突き動かされた房総の集団が東北の方に陸路、それから海路で入ってきます。この海路で行く途中にも大きな古墳が作られていって、この二つのルートが結ばれるところに雷神山古墳ができます。ですので、仙台平野周辺、名取川の流域というのは陸路と海路が合わさる交通ネットワークの要所、交易の要所だと思います。一方、日本海側の北陸の環境難民は日本海を北上しまして新潟を経由して、阿賀野川ルートから会津に入ります。会津盆地にも大きな古墳がたくさんできるのですが、それは北陸集団が拓いていくのです。このように、北陸集団と東海集団、その余波の南関東集団の北上によって東北の古墳時代は拓かれているという形です。

（三）古墳文化の最前線

この頃、北海道の続縄文集団

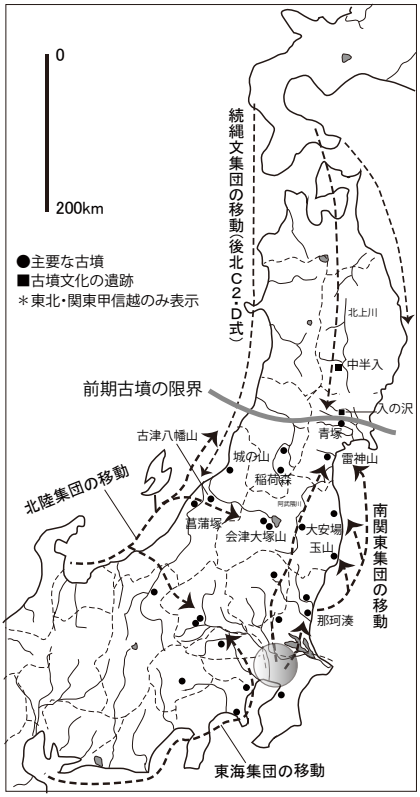


図３　東北・関東の古墳時代前期の関係図

という農耕を行ってない集団が、南下をしてきまして点々と痕跡を残すのですけども、その境界が宮城と新潟を結んだラインになります。これが前期古墳の限界線ですね。この、ここはちょうど先ほどの八木先生の城柵ネットワークのあの線と一致しております。青塚古墳というのが最北端の前方後円墳です。そして、この青塚古墳から二〇kmほど北上した宮城県の県北に入の沢遺跡というのが出現します。四世紀後半の環濠集落で、こういう集落（図4）です。尾根のトップのところに深い堀を巡らせ、さらに柵を巡らせているという防衛集落です。この防衛集落のすぐ下が実は伊治城なのですね。伊治公呰麻呂（これはりのきみあざまろ）が反乱を起こした伊治城、律令期の七六七年の最前線、そこと同じところに古墳前期の最前線があるというのは非常に示唆的ではないでしょうか。しかも、伊治城は平地なのですけれども、入の沢遺跡は丘陵上にあるということでより防衛性が高いということなのです。写真2～4が入の沢遺跡です。高いところに深い堀を巡らせています（写真3）。張り出しもあります。それからこれ柵の掘り込み（写真4）なのですけれども、一mぐらいの深い溝を掘って柵木を立てていくという堅固な集落です。そして、家が焼けています。襲われているのです。その焼けた家のところから青銅鏡が四枚でてきているのですけれども、これ通常ですと東北地方の相当上位の古墳に入る鏡です。東北地方では、八〇m級の古墳でも鏡を副葬していないのがありますので、ここの遺跡にいた主は亡くなれば相当大きな古墳に入った人だったということが分かるんです。そういう首長層が、この高い集落で防衛をしているというのが東北の古墳時代最前線であり、まさにその伊治城と同じところにあるとい

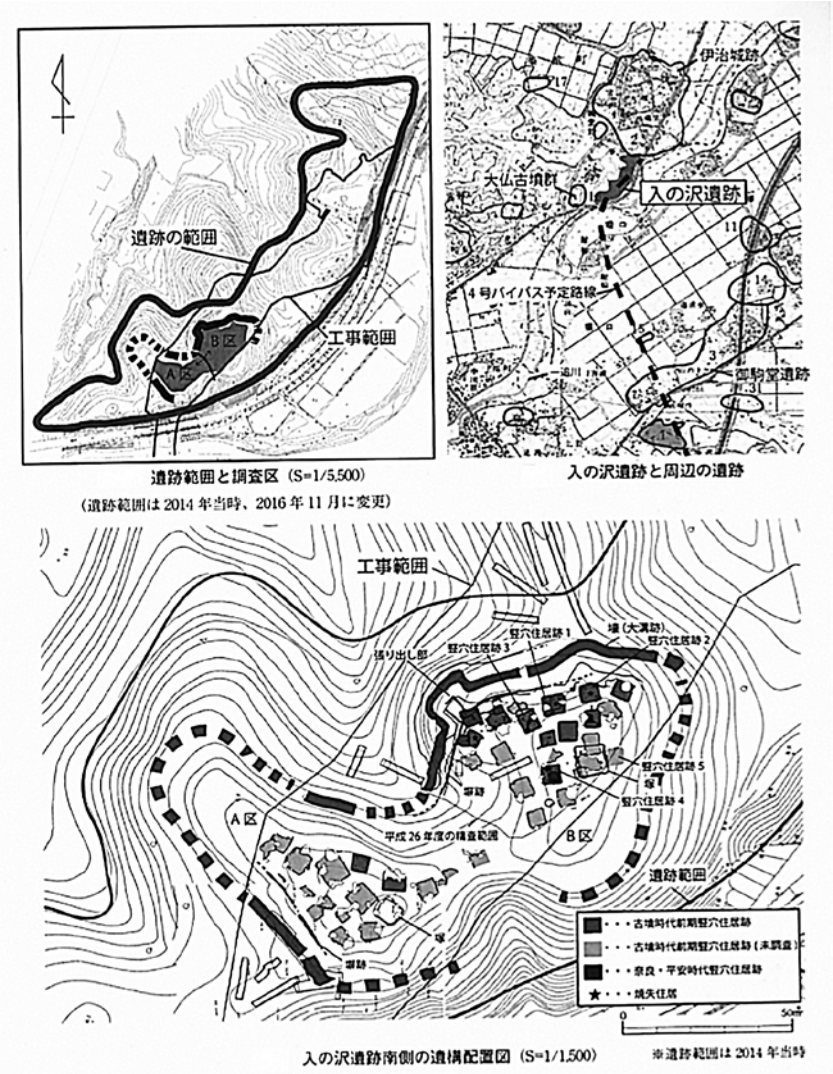


図４　入の沢遺跡

（村上祐次 2017「入の沢遺跡の調査結果」『古代倭国北縁の軋轢と交流』雄山閣）



写真２



写真３



写真４

写真２～４　入の沢遺跡
（写真は辻秀人編 2017『古代倭国北縁の軋轢と交流』雄山閣より）

うものです。

それからその伊治城の下層部でも古墳前期の溝で囲われた村が出ていますので、平地の拠点と山の上の防衛拠点があるという二重構造を持っています。ただ、この防衛対象が南下する続縄文集団に対してなのか、それとも古墳文化の中の鬩ぎ合いなのか明らかではありません。これからもっと研究が必要かと思います。

三　空疎化する東北の古墳中期前半

（一）大型前方後円墳の不在

ここで、東北の大きな前方後円墳をご紹介します。写真5が太平洋側最北の大型前方後円墳、青塚古墳です。前方部が削られているのですけど、大崎市にあります。それから日



写真５　青塚古墳（宮城県大崎市）



写真６ 稲荷森古墳（山形県南陽市）

本海側最北の前方後円墳としては、山形県の南陽市に稲荷森古墳（写真６）があります。そして、先ほどの八木先生のお話の防衛ラインの要のところの仙台平野には最も大きな一六八ｍの雷神山古墳が成立をしております。この前期後半の東日本の大型前方後円墳を挙げていきますと、一番は群馬県の浅間山古墳です。一七二ｍです。二番目は、甲斐銚子塚古墳で、これは山梨県にあり、一六九ｍ。そして第三位が雷神山古墳。この三基はほぼ同じ大きさですよね。で、四世紀後半の西日本を含めた巨大前方後円墳を挙げていくと大王墓とみられる佐紀陵山古墳、二〇九ｍ、宝来山古墳が二二七ｍで、東日本の三古墳とあまり差がないで

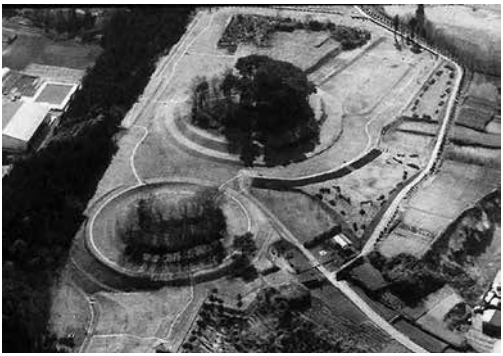


写真７　雷神山古墳

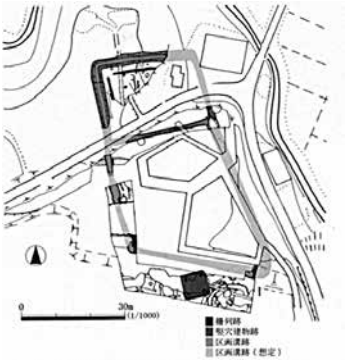


図５　伊治城の古墳前期遺構
（大谷基 2014『伊治城』『古墳と続縄文文化』高志書院。原典は築館町教委 1988）

すね。倭王権の力が、まだそれほど強固じゃありませんので大王墓と地方豪族墓がそんなに差がない時期です。それから丹後半島にも二百ｍ級の古墳がありますし、播磨の淡路海峡を押さえている五色塚古墳も一九四ｍ、後に吉備氏が登場してくる吉備の金蔵山古墳一六五ｍ、それからなんと九州南端部の大隅半島にも一五〇ｍの唐仁大塚古墳があるのです。中央の古墳が突出しておらず、周辺にも大きな前方後円墳があるというのがこの頃の特徴です。

　したがって、雷神山古墳に埋葬された人は、東北地方の共立王、諸豪族たちに支えられた人で、私は倭王権の同盟者の一員ではなかったかと考えております。四世紀後半というのは倭王権と地方豪族の同盟の強化がなされ、王権側は初めて対外進出をするという時期なのです。広開土王碑（中国吉林省集安市）が五世紀初頭に刻まれますけども、四世紀の終わり頃に倭と高句麗軍が激突したと書かれています。そういった東アジアと倭国の枠組みの中に、この東北の王が入ってい

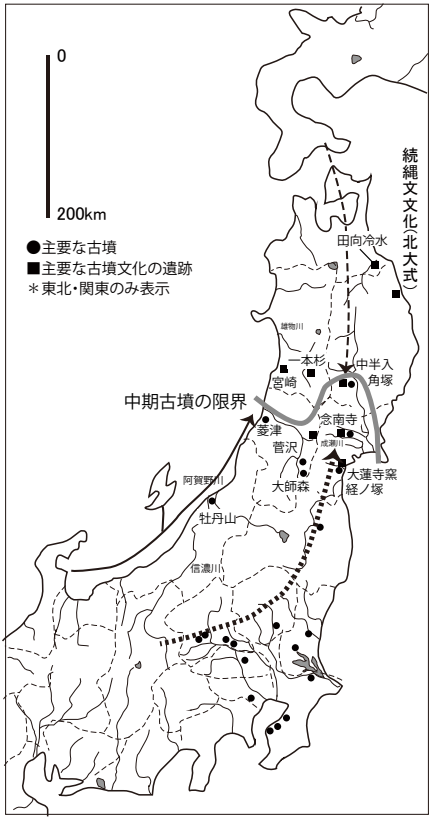
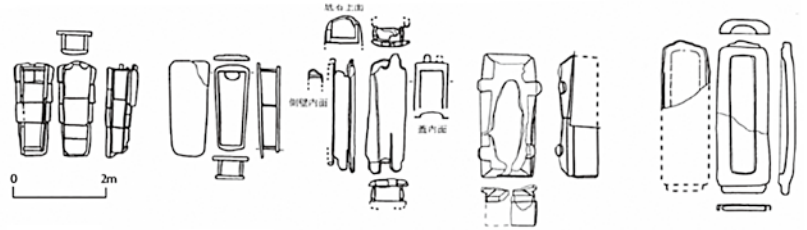


図６　東北・関東の古墳時代中期の関係図



菱津古墳棺　大師森山棺　経ノ塚古墳棺　念南寺古墳棺　会津大塚山所在棺

図７　東北地方の石棺（石橋 2013）

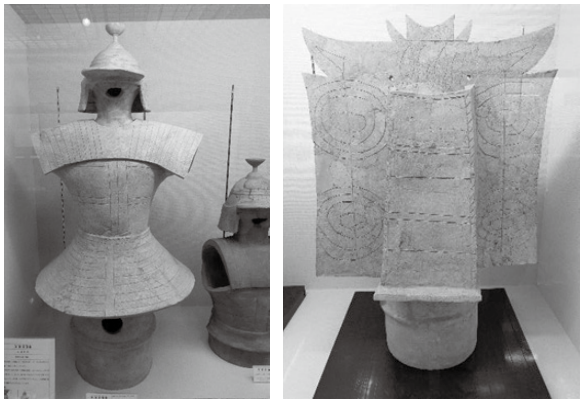


写真８　菅沢２号墳出土の畿内系埴輪

てもぜんぜんおかしくないんじゃないかと思います。

つづいて、中期の前半、ここは少し低調になるのですけども、中期の後半になりますと、またグーッと古墳文化が東北に伸びていくわけです(図6)。一つは日本海ルートが機能しています。新潟市の阿賀野川河口近くに牡丹山(ぼたんやま)古墳という新潟県で唯一、埴輪を持っている古墳ができます。後の渟足柵とほぼ重なる場所です。やはり、後の「城柵」は古墳時代の交易拠点、あるいは経営拠点と重なっているということが明らかです。このラインが海沿いに北に伸びていきまして、山形県に石棺文化が及んでいるのです。それから写真8のような畿内系埴輪の文化もこの頃に山形県に導入されていきます。一方、この頃、太平洋側でも前方後円墳が北上しまして、岩手県南部の奥州市の角塚(つのづか)古墳、ここまで北上していくことになります。このように、この時期は古墳群が一番、北進しまして畿内要素が強く入ってくる。そして、鉄器生産や馬生産、それから焼き物、特産品の琥珀の加工などの手工業が隆盛してくる時期です。さらに、東北にも

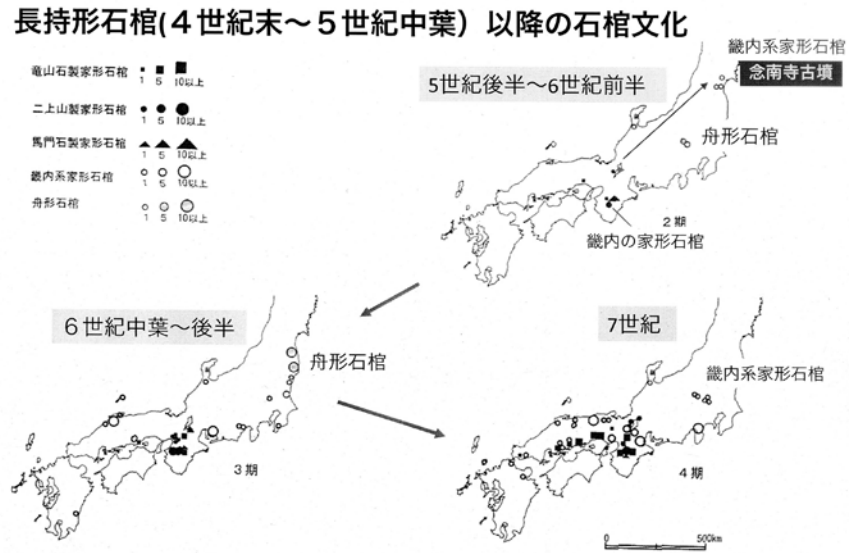


図８　５世紀後半以降の家形石棺・舟形石棺の分布推移図
（石橋宏 2013『古墳時代石棺秩序の復元的研究』六一書房より）

朝鮮半島系文物がちらほら見え始めたり、続縄文集団との交易、南北交易が強化される時期で、図６のような流通ネットワークができてきます。

（二）点的に存在する西の要素（図８）

西日本系石棺文化の展開について補足すると、この時期には、長持形石棺（石を組み合わせて作る大王の棺といわれている石棺）が畿内では流行するわけなのですが、その長持形石棺の模倣品、こういう立派な石棺が山形県の山中の洞窟遺跡から出てくるのです（写真９）。これ今年の夏、私、山登ってきたのですが、この洞窟の中にこの立派な長持形石棺が二基置かれています。それから太平洋側でも仙台市周辺の海岸部にやはり長持形石棺が導入されており、この北縁の地まで畿内系の石棺文化がいち早く



写真９　山形県大師山洞窟（左）と長持形石棺（右）



写真 10　念南寺古墳の家形石棺

及んでいるということがわかっています。

その長持形石棺に続きまして、畿内の方で流行してくるのが家形石棺なのです。その家形石棺も実は東北地方にありまして、日本の中でも古い時期の家形石棺が宮城県から見つかりました。宮城県の北縁部の念南寺古墳の埋葬施設から、この家形石棺が出てきてみんなびっくりしたわけなのです（写真10）。と申しますのも、念南寺古墳の石棺のほかにさらに二つの家形石棺が東北地方にありますが、実はこの頃の関東にはないんです。関東はこの頃、一段階古いタイプの舟形石棺というのを使っていました。大和の方で家形石棺が採用されるや、その出現したばかりの一番ニューモードの石棺を、関東を飛び越えて東北が持っているという現象なのです。中間地



写真 11　角塚古墳（岩手県奥州市）

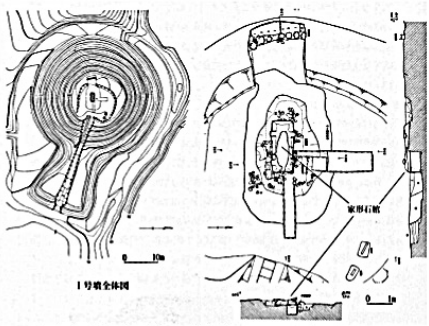


図 9　念南寺古墳と石棺出土状態
（高橋誠明 2014「古墳築造終焉域の地域社会の動向」『古墳と続縄文文化』。原典は宮城県教委 1998）

点を飛び越えてしまっているということなのです。関東で家形石棺が出てくるというのは六世紀末になってからなんです。それよりも百年以上古く東北の仙台平野周辺に家形石棺が導入されている、そういう動きに注目する必要があります。

四　北進する前方後円墳 ―中期中葉から後半の動態―

（一）関東の渡来人編成と前方後円墳の北上

この時期に北まで伸びていった古墳文化の象徴が、北縁の前方後円墳、角塚古墳です（写真11）。この角塚古墳のすぐそばから見つかったのが、中半入（なかはんにゅう）遺跡（奥州市）です。三〇m四方ぐらいを堀で囲んだ環濠遺構です（図10）。この中から竈付きの竪穴住居跡が出てきています。朝鮮半島から竈が日本に導入されて間もなく、東北まで導入されている。それから大阪で焼かれたきれいな須恵器がたくさん持ち込まれています。加えて、馬の遺体。日本で馬の生産が始まったのが、五世紀頃からなのです。その馬は国家財産になっていくのですけれども、その馬がいち早く五世紀

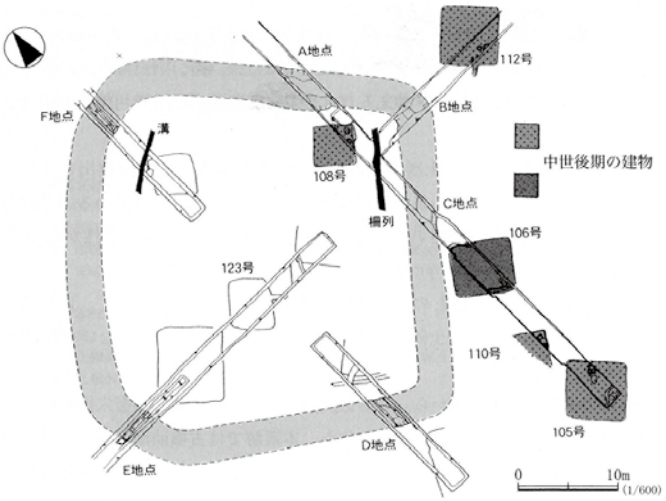


図 10　中半入遺跡の溝区画遺構
（大谷基 2014「中半入遺跡」『古墳と続縄文文化』高志書院。原典は岩手理文 2002）

後半に東北にまで及んでいる。私はこの一帯で馬生産をしていてもおかしくないのではないかなと思います。そのほかにも鉄器製作痕跡が出てきており、手工業を中心として産業振興をしている豪族がいる。その豪族が、この角塚古墳に葬られるという流れがわかるわけです。

　加えて注目されるのが続縄文土器と黒耀石製石器（図11）、これが出てまして、続縄文集団が加工した革などを西に流すという、物流拠点、生産拠点にもなっている可能性が高いということがわかっています。ということで単なる古墳だけではなくて生産拠点そのものが、ここまで北上し、中半入遺跡などを核にして北の集団と交易網を結んだとみられます。続縄文系の皮革加工職人を抱えこんでいる可能性すらあるわけなのです。この中半入遺跡と角塚古墳が実は後の胆沢城のすぐそば、数kmの距離にあります。

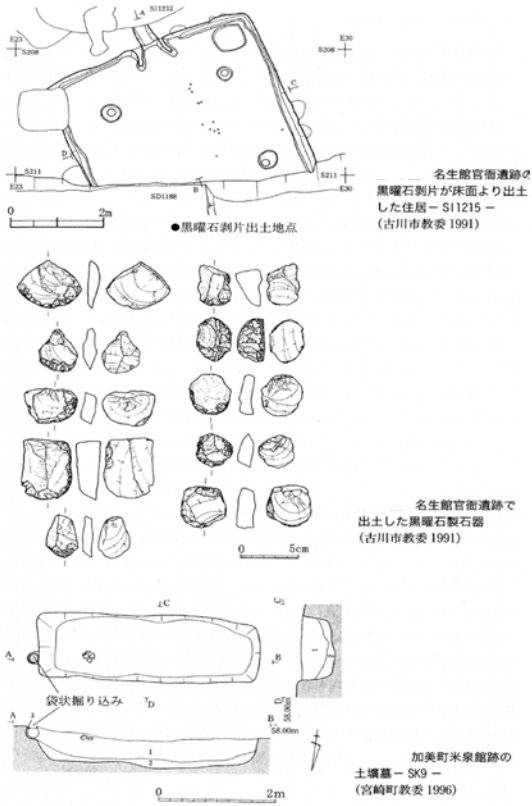


図 11　続縄文系石器と続縄文墓制
（（高橋誠明 2014「古墳築造終焉域の地域社会の動向」『古墳と続縄文文化』。
原典は古川市教委 1991、宮崎町教委 1996））

伊治城もそうでしたが、古墳時代の交易の最前線、地域経営の最前線が律令期の胆沢城とトレースされているというところも、非常に面白いですね。

なお、前方後円墳はここまでしかないのですが、古墳文化集団はもっと北上していまして、青森県八戸市田向冷水遺跡からは、竈つきの竪穴住居が見つかっています（図12）。出てくるものも土師器です。北東北の遺跡ですけれども古墳文化の土器を使っているわけですね。そういう集

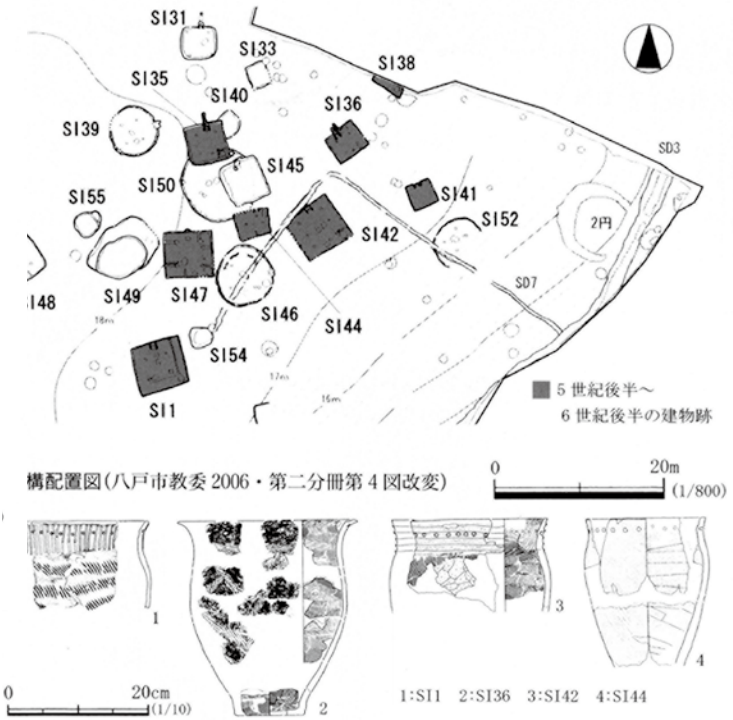


図 12　田向冷水遺跡

（大谷基 2014「田向冷水遺跡」『古墳と続縄文文化』高志書院 * 原典は八戸市教委 2006）

団が本州北辺に入ってきている。一方、そういうところに続縄文の土器もあったり、黒曜石製石器があったりしながらその交易関係も結んでいる。古墳文化の開拓者、交易者はどんどん北上しているのです。それから、在地の続縄文集団のお墓には、副葬品として立派な須恵器や土師器が入れられています。あちらの集団にも古墳文化側の文物が受容されていることがわかります。

（二）山形県地域の展開

それから日本海側の山形県にある大之越古墳に触れておきます（図13）。山形盆地にある中規模

の円墳で五世紀後半のものです。この円墳からは、図13の遺物が出ていまして、これペンチなのですけども、鉄鉗（かなはし）といいまして、鍛冶屋さんが鉄を打つときに持つペンチなのです。それから、非常に古い馬具があります。それから鉄の斧があります。ただこの斧もちょっと不思議な形をしておりますので、渡来系の遺物の可能性があります。もう一つはこの大刀です。環頭大刀といって鳳凰がモチーフの大刀です。日本ではこの大刀はたいへん流行するのですけれど、それは六世紀なのです。ところがこの古墳は五世紀の後半なのです。図14は、五世紀後半の環頭大刀の分布なのですが、ほとんど輸入品です。朝鮮半島から招来された環頭大刀を西日本の人たちが持っているのが分かる。しかし、北で持っているのは、この東北の大之越古墳だけなのですね。ということで、大刀の系譜、その他の鉄鉗とか、馬具を持っているということを考えますと、この大之越古墳の被葬者というのは非常に渡来色の強い人の可能性があると思うのです。倭人だとしても渡来系の集団と非常に密接な関係を持っている人でしょう。この時期になりますと東北にも朝鮮半島系の文物を持っ



図 13　大之越古墳の出土品
（石井浩幸 2004「山形県南部における古墳主体部の副葬品」『出羽の古墳時代』高志書院）

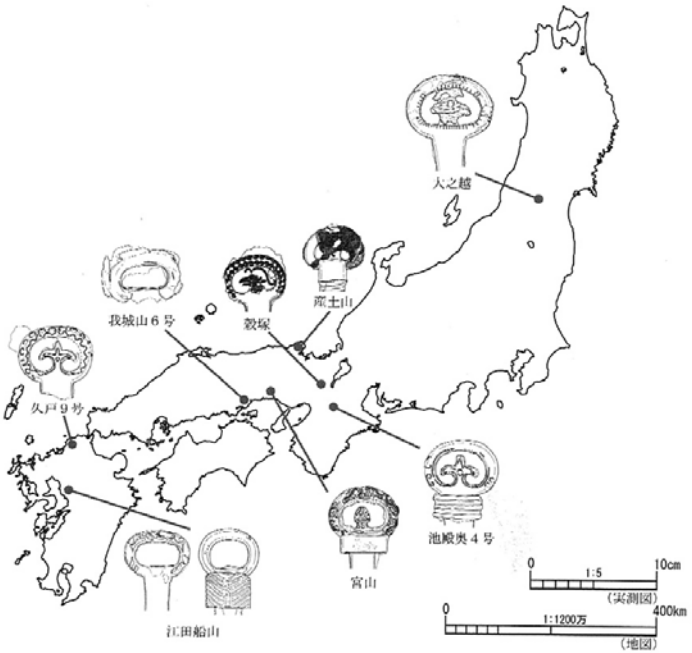


図 14　中期後半における装飾付環頭大刀の分布
（金宇大 2017『金工品から読む古代朝鮮と倭』京都大学学術出版）

た人やその技術が流れこんでいるということなのです。この頃、北関東の群馬県地方、それから長野県地方などでは渡来人を大量に導入しまして馬生産を始めていきます。四世紀末に、高句麗で騎馬軍団に負けた倭人は、これからは東アジアでやっていくには馬を導入しなければと思って馬生産を始めていくのですね。自動車生産を始めるような感じなのですけれども、そういう新産業を倭王権の委任を受け、東国で始めていると思います。そして、そこで育った馬を大和に送っていると思うのです。そういう波がこの出羽の地にもいち早く及んでいると考えることが可能です。

そして、後期の前半には東北の古墳文化はまたちょっと落ち込むのですが、後期の後半になりますとだいぶ状況が変わってきます。



写真 11　名生館遺跡出土の関東地方土器系（左下）



写真 12　山畑横穴墓群（宮城県大崎市）

五　東北地方の南北での後期古墳築造の差異

（一）関東における前方後円墳の多出

欽明朝ぐらいの時期になると、関東で前方後円墳がたくさん造られるようになるのです（図15）。一方で、大和の方では王権の力が非常に強くなり、それまで前方後円墳を造っていた豪族たちが前方後円墳を止めて、大きな円墳や方墳を造るようになってくるわけです。官僚化が進んだ状況で、

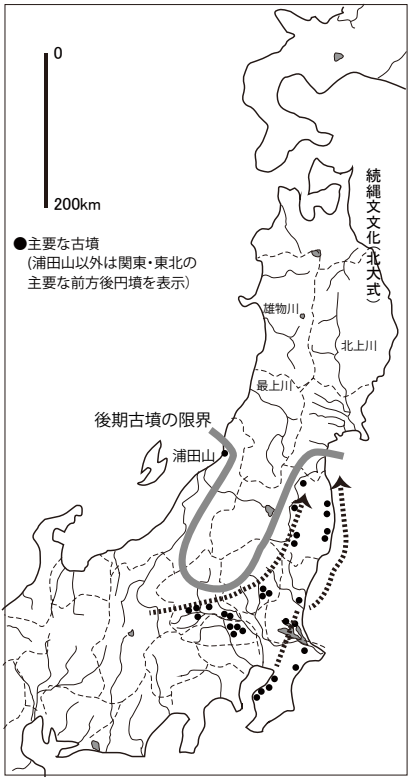


図 15　古墳後期の状況

大王と物部氏とか、有力氏族だけが前方後円墳を造るようになっていきます。そういう中で関東だけ前方後円墳を大量に造りつづけるという現象が起こるんです。六世紀後半の倭の大型前方後円墳の大半は関東にあります。なぜ、関東にこんな前方後円墳がいっぱい造られたかといいますと、王家や中央氏族が東国の勢力と強くタイアップをした。経済的・軍事的に東国に依存をして互恵的関係を結んだと考えられます。屯倉（みやけ）のような経済基盤を、東国各地に置いていくということを行います。そういうなかで古い価値体系である前方後円墳制度を温存する状況が残りました。関東の中では倭王権とタイアップしたことを周りに見せつけ、他の在地豪族と差別化するために前方後円墳をたくさん造っていたのです。

（二）東北地方における前方後円墳築造の温度差

これだけの数の前方後円墳を造れる経済基盤があったということで、この頃は関東の生産力がものすごく高まっていると思うのです。その経済力に倭王権は依存をするし、またその経済力を高めるた

能性が高いと言っています。このときに、福島県地域に前方後円墳が復活をしていくわけなのです。同時に東北地方南部にも国造が任命されたのではないかと推定をされているところです（図16）。この頃、この東北地方に復活する古墳の様式というのは常陸と非常に似ています。常陸の埴輪様式、それから常陸を介した横穴墓とか装飾古墳などを導入していますので、東北地方南部をもり立てたのは、在地の人々と共にこの関東の常陸とか、もともと人がやってきた千葉とか南関東の影響でもう一回、前方後円墳が復活してくる可能性が高いと思います。

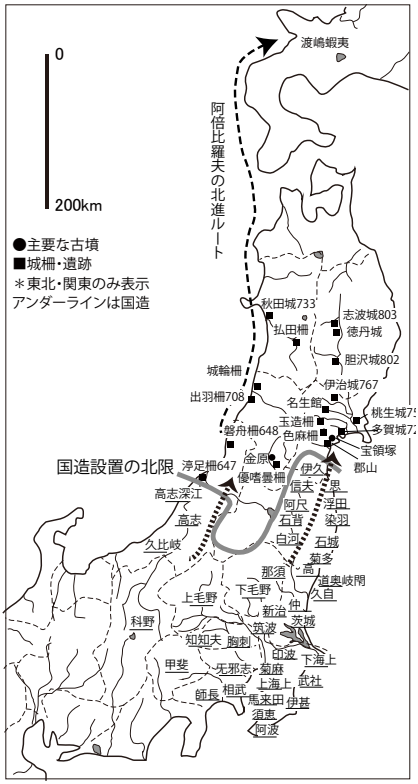


図16　東北・関東の古代の関係図

六　終末期から末期古墳の動向終末期古墳と横穴墓の展開

その古墳時代が終わるとき、そこにも大きな画期性があります。一つは関東系土器の出現と集団移住です。六世紀後半ぐらいから仙台平野、それから宮城県にかけて関東系土器が出てきますので、ここでまたかなりの移民が発生したのだろうと言われております（写真11）。そして、大規模群集墳や横穴墓、これが宮城県の北部まで造られています。こういう広域的な関東系土器や人の移動現象というのは、文献の記事よりもちょっと早く起こっております。文献では、上毛野君形名（かみつけぬのきみかたな）の蝦夷征討将軍の就任ですとか、阿倍比羅夫の北征とか、7世紀の中頃から現れるのですけれども、考古学的にはそれよりもだいぶ早く関東の人たちの北へのアプローチというのは始まっていると考えられます。それから、関東系の人々の影響のほかに、もっと広域的な人の移動というのもあります。その代表は「肥後型横穴墓」です。ここが今日のテーマとちょっとだけ重なってくるのですけども、鞠智城がある菊池川流域に盛行した肥後型横穴墓というのが宮城県の一番北端に造られているのです（図17）。九州と東北との人的交流がこの頃から起こっていることがわかります。参考としまして、『続日本紀』に陸奥国の志太郡の生王五百足（みぶいおたり）という人が白村江の戦いに従軍したという記事があるんです。この志太郡というのは、まさにこの大崎地域のことだといわれておりますので、文献と考古学的な証拠というのがマッチングしてくる。いずれにしても、東北で前方後円墳が復活する地域、それと国造が置かれている地域というのが重なっていきます（図15・16）。そして、これより北が城柵が作られていく地

域ということになります。

写真12は大崎市の鳴瀬川南岸にあります川畑横穴墓群の写真ですけれども、これが東北の肥後型横穴墓です。図17のように三方に棺座を作りだします。菊池川流域の横穴墓も三方に棺座を作り出しており、そっくりですね。

小結

時間になりましたのでまとめますけれども、古墳時代における東北へのアクセスというのは、古墳前期の大規模移住から始まります。環境難民が太平洋側、日本海側から東北に大量に移住をしていって古墳文化を開きました。それで前期のうちに農業開発に成功をし、東日本三大前方後円墳の一つである雷神山古墳を造りあげる。私は王権との連合を果たしたのではないかなと思っています。その北辺のエリアが、後の伊治城と合致している。

それから中期後半になりますと前方後円墳と古墳文化が北進します。この中期後半というのは、汎列島的な技術革新の時代です。明治維新と同じぐらいの革新の時代だと思っているのですが、朝鮮半島の新しい技術を導入して列島中が技術革新に燃えた時期です。その波がちゃんと東北まで来ているのだということになります。その北進した交易拠点・開発拠点が胆沢城と合致しているということです。さらに、関東を飛び越えた中央との関係も見られます。中期の石棺のダイナミックな動きに加え

て、中期後半には窯業、須恵器生産が始まりますが、東北の須恵器窯は関東の須恵器窯より古く始まるのです。非常に先進的な動きも見せているということになります。

後期後半には、中央の王家や中央氏族との政治的結合を進めた関東と、東北地方南端エリアは同じ流れの中に位置付いてくるということで、国造が置かれるなど、非常に関係性を蜜にします。そういう流れの中で集団交流が活性化をして、例えば九州から人が動くだとかということも起こってきます。

ということで、今後の課題ですけれども、蝦夷とされた人々は、得たいのしれない人たちではなくて、かつては古墳を造っていた人たち、しかも古墳前期には大型前方後円墳を造っていたような古墳文化に浴した人たちも含まれているということですね。歴史的な形成過程は多様で、その多様さを把握していく必要があるだろうと思います。しかしながら、やはり東北地方は環境的に厳しいです。環境変動の中で古墳の築造状況が伸び縮みを繰り返すのですが、その環境変動を克服していくような社会はどう成立していくのだろう、それが律令社会にどう結びつくのだろうということを、気候変動も含めて考えていく必要があるだろうと思います。そして北海道からも須恵器が出るわけですが、そういう広域経済活動と



図 17　肥後型横穴墓の比較
（熊本県教委 1984『熊本県装飾古墳総合調査報告書』、池上悟 2000『日本の横穴墓』雄山閣）

日本列島全体の「物流ネットワーク」を、これからよく考えていく必要があるだろうと思います。

こういったダイナミックな動きがあった後に、城柵が造られていくということをご紹介いたしました。どうもありがとうございました。